

書評

[評者]

兼子 直

弘前大大学院教授・神経精神医学



てんかん鑑別診断学

Peter W. Kaplan, Robert S. Fisher 編
吉野相英, 立澤賢孝 訳

B5判 頁352 2010年

定価 9,975 円(本体 9,500 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-01028-3]医学書院刊

“Imitators of Epilepsy”という書籍の第2版を訳出したのが本書『てんかん鑑別診断学』である。てんかんの約30%では抗てんかん薬で発作が抑制されないが、その中の一部は診断が十分ではなく、非てんかん性発作を抗てんかん薬で治療を試みている可能性がある。あるいはてんかん発作を他の疾患と誤診し、正しい治療が行われていない場合があることも事実である。これらの原因の一部には、精神科医のてんかん離れで、てんかん発作と症状が類似する精神疾患をてんかんと診断する、あるいは非てんかん性発作に不慣れた神経内科医、小児科医、脳外科医がてんかんを鑑別できないことが関連するのであろう。本書はかかる状況克服にとり極めて有益な訳書となった。

概論の部分では非てんかん性発作の脳波所見、てんかん発作とは思えないユニークなてんかん発作、非てんかん性けいれん発作の章が興味深い。「年齢別にみた非てんかん性発作」の編では、「新生児と乳児の非てんかん性発作」や「小児期と思春期にみられる非てんかん性発作」の章で実に多数の鑑別すべき疾患がま

とめられている。最近てんかん発症が増加している「老年期にみられる非てんかん性発作」についてもまとまった記載がある。

「てんかん発作をまねる様々な疾患」の編では片頭痛、めまい、発作性運動障害、内分泌代謝障害・薬剤性障害、睡眠障害、脳血管障害等のどちらかと言えば神経関連障害と、過換気症候群、心因性発作、パニック発作などの精神関連障害とに分けて考察されている。

各章では鑑別に必要な症状・病態生理が記載されている。一部の章では症例の提示があり、治療法にも触れられている。

本書は精神症状診断に不慣れた神経内科医、小児科医、脳外科医だけでなく、精神科医にとってもてんかんを見落とさないために極めて有用である。若手医師のみならず「てんかん専門医」にとっても日常診療ではあまり遭遇しない疾患の知識を整理する上でも役立つ。共同執筆のため、一部の記述に繰り返しが見られるのは致し方ないであろう。発作性疾患を診ることが多い臨床家にとり一度は目を通したい本である。